ヘルスリテラシーを育むＮＩＥ活用の可能性
―「スクラップノート」作成を例に ―

保健体育科　佐　藤　健　太

1. はじめに

本校は文科省よりＳＧＨ（スーパーグローバルハイスクール）に指定され、平成26年度から5年間にわたる研究開発に取り組んでいる。2年生の総合的な学習の時間では、グローバルな社会的課題の発見・解決を目指し、探究的な学習を行う「持続可能な社会の探究Ｉ（以下、探究Ｉ）」を実施している。探究Ｉには複数の講座が設定されており、生徒は自ら設定した探究テーマに応じて講座を選択できるようになっている。私の担当する「生命・医療・衛生（以下、生命）」講座では、生命倫理・保健医療・公衆衛生等に関するテーマを扱い、生徒は年間を通して探究活動に取り組んでいる。ＳＧＨの概要や各講座の活動内容、生徒の探究成果については、本校が発刊しているＳＧＨ研究開発報告書、生徒研究論文集及び研究紀要等をご覧いただきたい。

さて、「生命」講座を受講する生徒のうち、1年次の保健の学習内容から興味関心を抱いたことや疑問に感じたこと、より理解を深めたいことについて調査し、さらに掘り下げて考えたいというきっかけから本講座を選んだ生徒も少なくない。また、本校は医歯薬学系、保健衛生系の進路を選択する生徒が毎年一定数おり、自身の志望するキャリアと密接な関わりがあることから、「生命」講座で意欲的に学習・探究する生徒が多くみられる。したがって、2年次の探究Ｉ（探究活動）との接続性や親和性を意識しつつ、1年次の保健の授業づくりや教材開発を視野に入れていくことが求められよう。

一方で、科目保健では探究Ｉで「生命」講座を選択する生徒のみを対象としているわけではなく、自身の希望進路と関係のない生徒に対しても保健の授業を通じて健康に関する知識を身につけ、生涯を通じて健康な生活が送れるよう、魅力的な授業を提供しなければならない。ところが、週1回の保健の授業を毎回心待ちに1週間を過ごしている生徒は実際のところ少ないのではないだろうか。そこで、保健への知的好奇心が高い生徒も、そうでない生徒にも、保健に対する興味・関心を持続させつつ、ヘルスリテラシーの育成へとつなげていける実践について検討を重ねた結果、ＮＩＥの活用にポシビリティーを感じ、年間を通したスクラップノート作成の継続的な指導へと行き着いた。本稿ではこれまでの実践を振り返り、保健における新聞活用の可能性を探るとともに、スクラップノートの作成が生徒の保健学習に対する意識や学び方にどんな影響を及ぼしたのか、またヘルスリテラシーの育成にどういった効果がみられたのかをまとめ、成果と課題及び今後の展望について報告したい。

2. ヘルスリテラシーについて

ＮＩＥについて触れる前に、まず先述したヘルスリテラシーの概念について確認しておきたい。ヘルスリテラシーとは「健康情報を入手し、理解し、評価し、活用するための知識、意欲、能力であり、それによって、日常生活におけるヘルスケア、疾病予防、ヘルスプロモーションについて判断したり意思決定をしたりして、生涯を通じて生活の質を維持・向上させることができるもの」*1 と定義され、認知面・社会性を含めた広義の概念であることが示されている。ここでいう認知的スキルとは「自分の心身の変化に気づいたり、健康課題について思考したりする力」をいい、社会的スキルとは「個人や集団の健康問題について話し合ったり、協力したり、支え合ったりする力」のことをいう。保健学習を通じて、ヘルスリテラシーを向上させていくことは必要不可欠なのはいうまでもない事実だが、保健学習推進委員会報告書 *2 による保健学習の課題には「学習した知識を活用できていないという課題に対して、自分の生活習慣から課題を見つける力や氾濫する健康情報の中から、自分に必要な正しい健康情報を選択し、活用する力の必要性が指摘されている。」といった報告がなされている。それに対し、中教審初等中等教育分科会 *3 は「健康課題を発見し、習得した知識を活用し課題解決する学習や論理的な思考力の育成」の必要性を唱えている。このような経緯から、保健学習において多様に変化する社会（健康課題）に対し、その時の状況に応じて必要な知識を活用する力が求められており、その中でも健康情報を活用するための認知的、社会的スキルの育成に重心が置かれていると捉えられよう。なお、山本 *4 によると保健教育におけるヘルスリテラシーには**図 1** のような要素が相互に関連し合っており、特に「健康情報リテラシー（自分に必要な健康情報を選択し、活用する力）」の果たす役割が大きいと説いている。そこで、健康情報リテラシーの育成につながるような実践を本格的に検討することにした。

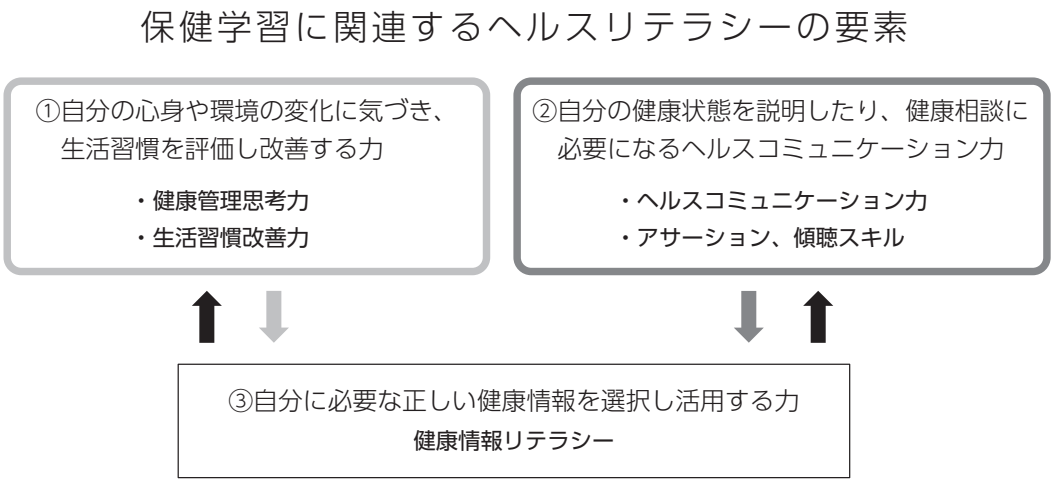


図 1　保健学習に関連するヘルスリテラシーの要素（山本 2011）

3. ＮＩＥの導入

冒頭にも述べたように、週１回の保健の授業だけで生徒へ日常的に健康を意識させたり、保健の学習内容を定着させたりすることはやはり難しい。結局のところ、毎回の授業と学期末の定期テストの学習のみとなってしまい、年間を通じて生徒の保健学習に対する興味関心をつなぎとめることのできない現状に憂慮していた。さらに、上述した健康情報リテラシーの育成に結びつくような取り組みについて、何か良い手段はないかと模索していたところ、「ＮＩＥ（エヌ･アイ･イー）」の取り組みに出会った。ＮＩＥとは“Newspaper in Education”の頭文字をとったもので、教育現場において新聞を教材として活用することをいい、1930 年代にアメリカで始まり、日本では 1985 年に行われた新聞大会で提唱されたといわれる。また、ＮＩＥのホームページ *5 によると、学習指導要領との関連の中で『ＮＩＥは新聞の特性（一覧性・俯瞰性・解説性・詳報性・記録性・携帯性・保存性など）を活用して「今」を取り入れる教育である』と述べられており、高い教育効果をもたらすと紹介されている。そのような背景から、ＮＩＥについてはこれまでに多くの学校種において導入・実践されており、現行の学習指導要領 *6 でも「新聞を活用して～」との文言が所々に登場している。さらに、ＮＩＥのホームページには高校現場での国語、地理歴史、公民、総合的な学習の時間等の教科における他校の実践例を多く確認することができた。ところが、保健体育でのそれはほぼ皆無だったため、保健の授業においてＮＩＥを活用した取り組みができないか、検討の余地があろうと考えた次第である。その中でも、保健が受験科目でないことや１単位科目であること、学習内容を生徒自身の実生活に反映させたいこと、健康情報リテラシーの育成に寄与すること等を考慮し、長期にわたり継続して取り組め、かつあまり生徒の負荷にならないよう細く長く続けられる活動を条件に教材化の可能性を探ることにした。加えて、2 年次の探究Ｉでは、どの講座においても情報収集能力や情報活用能力が要求されることから、インターネットによる情報収集に慣れ親しんでいる生徒にとって、1 年次にアナログ媒体（新聞・書籍）における情報収集の訓練や経験をさせておきたいと判断したことも理由の１つとして挙げられる。

4. 生徒自身がＮＩＥを活用する「スクラップノート」の実践

まず、ＮＩＥを活用した自身のこれまでの実践例を振り返ってみたが、単元に関連する新聞記事を教材プリント等に盛り込み、授業を通じて生徒に紹介する程度だった。このくらいであれば、他教科でも当たり前のように実践されており、一般的な取り組みといえよう。しかし、指導者による新聞活用もさることながら、生徒自らが意識的に新聞に触れてほしい、授業のみならず日常的に保健への興味関心を高めてほしいといった願いから、そして上述したような科目としての様々な特性や健康情報リテラシーの向上をふまえ、保健でＮＩＥを活用するにはどんな取り組みが適しているかを追究した結果、生徒自身による「スクラップノート」の作成が有効ではないかという結論に辿り着いた。

スクラップノートとは、何らかのテーマに沿って新聞の切り抜き記事をノートに貼付し、蓄積していくものをいうが、ここでは保健学習の一環としてスクラップノート

作成に取り組ませるため、保健の内容に関連した記事に限定してスクラップさせていくこととした。そうすることで、年間を通して保健に関するニュースや話題に常にアンテナを張り、週１回の授業だけでなく授業のない曜日も保健を意識できるのではないか、また授業にも高いモチベーションを維持しながら臨めるのではないか、そしてヘルスリテラシーの視点では、最新かつ正しい健康情報の入手・選択・活用に結びつくことを期待した次第である。

5. スクラップノートのルール

初回授業時のオリエンテーションにおいて、スクラップノートの作成手順を説明した。まず、スクラップ用のノートまたはファイル（見開きＡ３サイズ）を１冊用意するよう指示し、年度初めの４月から翌年３月までの１年間をスクラップ期間とした。また、スクラップする対象物はＮＩＥの実践ではあるものの、新聞を中心としつつ、雑誌・刊行物、インターネット（Web ニュースに限る）等の情報媒体も可とした。その理由については後述することとする。なお、インターネットから記事を収集する場合は該当ページ（スクリーンショット含む）をプリントアウトしてスクラップノートに貼付するか、記事を自らノートに転写してもよいこととした。

次に、単に記事をスクラップして収集するだけでなく、貼付した記事の余白スペースにスクラップ元（新聞・雑誌・刊行物）の名称、新聞であれば朝刊・夕刊の別、日付、Web 上のニュースであれば出典元や閲覧日等もあわせて余白部分に記載するよう指示した。さらに、その記事を読んだ上で、記事の要約・概要、自分の意見や考え・感想等を簡潔に記入させることとした。

スクラップノート作成の手順

①新聞（雑誌・Web ニュース含む）を用意し、閲覧する
②記事を探す（保健関連の記事を見つける）
③記事を読んで内容を理解する
④記事をスクラップする
⑤スクラップ記事をノートに貼る
（③〜⑤は順不同）
⑥記事の出所・日付・出典先等の情報を書き出す
⑦記事についての大まかな概要と自分の考えや感想等を記入する
⑧必要に応じて、書籍や Web 等で関連・類似する情報を調査し、補助資料を添付する（⑧は必須としない）

6. これまでの経緯と生徒の取り組み

本実践導入時は全員に「スクラップノート」を課そうかとも考えたが、まずは試しに希望者のみに提出を促し様子を伺うことにした（2014 年度：69 回生１年次）。スクラップノート提出者には内容及び分量に応じて加点することを伝え、少しでも意欲的に取り

組めるよう働きかけた。ところが、取り組みを始めて間もなく、ある問題に直面した。それは、新聞のみのスクラップに限界があることが浮き彫りになったのである。はじめはスクラップの対象を新聞のみに限っていたが、近頃は新聞を購読していない家庭が増えており、生徒から「新聞をとっていないので、スクラップできない。どうしたらよいか？」といった問い合わせが続出した。大学図書館や地域の公共図書館での閲覧・コピーを勧めることも考えたが、手間や時間・労力等がかかり、課題への意欲が削がれてしまうことが懸念された。そこで、新聞のみにこだわらず、前述したような新聞以外の紙媒体のメディアをはじめ Web ニュースやニュースアプリといった情報源にも収集対象を広げることとした。最近では、多くの生徒がスマートフォンを携帯しており、Web ニュースやニュースアプリから手軽に情報を得られる実情を考慮し、新聞以外の媒体でもとにかく目に留まった保健に関する記事を幅広く収集することができるようにした。

スクラップノートの回収頻度・時期は年 3 回・各学期末とし、こちらで内容をチェックした上でコメント等を入れて生徒に戻すといった作業を繰り返した。1 学期末には各クラスで 10 名前後（約 25%）の生徒から提出があったが、次第に 2、3 学期の回収時には提出人数が減っていく現象もみられた。しかし、粘り強くこまめにスクラップを続け、最後までノートを作成した生徒は年間で 1 冊に収まらず、2 ～ 3 冊目に到達する生徒もいた。そんな毎日のように新聞とにらめっこした生徒のノートは記事の内容も多岐にわたり、質の高い見応えのある作品が多く見受けられた。提出のあった生徒から 1 年間スクラップノートに取り組んでみての感想を集約したので、その成果についての考察は後に述べることにする。

ある程度の手応えをつかんだ 2 年目（2015 年度:70 回生 1 年次）には、任意提出だった方式から全生徒に提出を求めることにした。その意図として、やはり一部の意欲的な生徒だけでなく、興味関心の低い生徒にこそスクラップノートに取り組む価値があると思ったからである。それに合わせて、朝日新聞社が主催する「全国新聞スクラップコンクール」*7 に作品を応募することで、取り組みへのモチベーションを高めた。その甲斐あってか、充実した内容のスクラップノートが多く提出され、そのうちの 1 名が上述したコンクールにて奨励賞を受賞した（**資料 1**）。一方で、中には未提出者や提出しても記事が 1 ～ 2 枚しかない生徒も若干名見受けられ、取り組みへの意欲や継続性に課題が残った。

翌 2016 年度（71 回生 1 年次）もコンクールへの応募と上位入賞を視野にスクラップノートを課すつもりだったが、2015 年度を最後に全国新聞スクラップコンクールが終了してしまい、コンクールへの応募ができなくなってしまった。先輩（70 回生）から保健の授業におけるスクラップノートの取り組みとコンクールの応募について事前に情報を聞いていた 71 回生にとって、コンクール終了は生徒のノート作成への意欲を削がれてしまった感があり、非常に残念だった。コンクールには応募できない旨を生徒に伝えると、生徒は落胆の色を隠せず、後ろ向きな声が聞かれた。この年もこれまで同様にスクラップノートへの取り組みを継続したものの、コンクール終了の影響からか、例年の作品と比べると 71 回生のノートの完成度には全体的にやや物足りなさを感じた。

No.
Date 2015年6月25日

同世代の自殺 防ぎたい

6/25

支え方 ともに学ぶ講座

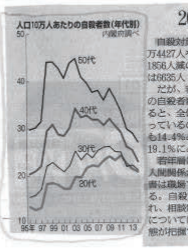
22日に発表された2015年版の「自殺対策白書」は、若者の自殺を初めて特集しました。自殺者数は年々減っていますが、若者は減り方が鈍いためです。そうした状況下で、悩みを抱える若者を支援しようと、同年代による取り組みが始まっています。

友人らを支える人、支えたい人同士で語り合う「ライトリングタイム」＝5月、東京都内

若者の自殺に関しては、職場や学校、家庭等、周囲の人がその変化に気づき、専門家に適切につなげ見守ることが大切であるとともに、周囲の人ばかりでなく、自治体、保健所、精神保健福祉センター、医療機関、学校、民間団体等、地域の関係機関が連携していくことが必要。
内閣府より

ライトリング
OVA

20・30代、鈍い減り方



自殺対策白書によると、国内の自殺者は03年の3万4427人をピークに減少傾向にあり、14年は前年比1856人減の2万5427人。このうち40歳未満の若年層は6635人（26.1%）だった。

だが、若年層の減り方は鈍い。人口10万人あたりの自殺者数（自殺死亡率）のピーク年と減り方をみると、全体ではピーク年は03年でそこから25.9%減っているのに、20代はピークが11年と遅く、減り方も14.4%と少ない。30代もピークは09年で、減少も19.1%にとどまる。

若年層はほかの年代に比べ、仕事の失敗や職場の人間関係が自殺につながる割合が高いことから、白書は職場でのメンタルヘルス対策の必要性を指摘する。自殺する時間帯は午前0時台にピークがみられ、相談電話の深夜までの延長を提言した。無職者については、自ら支援を求めることは少ないため実態が把握できないという現場の声を紹介した。

若者による取り組み広がる

東京都内で5月、悩む友人の力になりたいという若者を対象に、支え方を考える講座が開かれた。学生や会社員ら15人が参加し、それぞれの体験を語り合った。

「相手の悩みに踏み込みすぎると疲れる」「支えたいから支える、ということじゃないと自分もつらいし、相手も嫌だと思う」。そんな意見が交わされた。「相談にのっていて疲れたとき、どう対応する」といったケースを想定して話し合う時間もあった。

主催したのは若者の自殺防止に取り組むNPO法人ライトリング（http://lightring.or.jp）。2010年に設立され、身近な人を支える「ゲートキーパー」を育成する活動に取り組む。

代表理事で精神保健福祉士の石井綾華さん(25)は「人は本当に苦しいとき、助けを求めることさえできない」と言う。その苦しみに気づき、耳を傾けるのがゲートキーパーで、国は07年から育成を進めている。

ライトリング代表理事の石井綾華さん

だが、支え手自身が無力感や自責の念を抱え込む姿も石井さんには見えてきた。「ライトリングは、支える人も疲れたと言える場。同じ境遇の仲間と学び合い、自分を苦しめることのない支え方を見つけてほしい」と話す。

東北地方から参加した大学生佐藤純さん(22)は、2年前、恋人を自殺で亡くした。夜中の電話で彼女が仕事の愚痴を話すのを、早々に切り上げた。3日後、死を知った。

彼女は学生だったときから「生きていてもつまんない」「死にたい」と口にすることがあった。理由は言わない。佐藤さんは「そのうちいいことあるんじゃない」「なんとかなるよ」と答えていた。どうしていいかわからない、まさか本気でないだろう――。そんな気持ちがあった。自分自身も進路が見えずに余裕がなかったと振り返る。

彼女の死を無駄にしたくないと、自殺防止の活動を調べた。「ライトリングは代表者が同年代なのでハードルが低かった」。それでも申し込むまでに5カ月かかった。「自分の経験が他の人の参考になるかもしれない。自分も支える力をつけたい」と話す。

ゲートキーパーとは
悩んでいる人に気づき、声をかけ、話を聞いて、必要な支援につなげ、見守る人のこと
内閣府ホームページより

ゲートキーパーの役割
- 気づき：家族や仲間の変化に気づいて、声をかける。
- 傾聴：本人の気持ちを尊重し、耳を傾ける
- つなぎ：早めに専門家に相談するように促す。
- 見守り：温かく寄り添いながら、じっくりと見守る。

内閣府より

周りに悩んでいる人がいたら自殺する前に様子がおかしかったりして気がつかれると思うが、無職者など、他人と会う機会が少ない人は難しいと思った。

ネット広告に相談入り口

OVA代表理事の伊藤次郎さん

誰にも相談できず、悩みを気づいてもらえない若者は、インターネットにアクセスするのではないか。NPO法人OVA（オーヴァ）代表理事の伊藤次郎さん(30)は2年前、「死にたい」という言葉が検索された回数を調べてみた。月十数万回。「宛先のないSOSだ」と思った。

特定の言葉を検索すると連動して表示される「リスティング広告」を活用し、自殺を防ぐ無料相談に東京都内で取り組む。

都内で、検索サイトのグーグルに「死にたい」「自殺方法」などと打ち込むとOVAの広告サイトが現れる。そこを入り口に相談のメールを送ることができる。伊藤さんら精神保健福祉士などの資格を持つスタッフ4人が応じる。

緊急時には電話を使い、相談者の元へ駆けつけたこともある。メールのやりとりから問題点を整理し、行政機関や病院などを紹介する。その後も「相談してどうでしたか」などと尋ねて緩やかにつながり続ける。これまでに1万3千人あまりが閲覧し、300人以上がメールで相談を寄せた。20、30代が8割を占める。

「お金がない。子どもと心中するしかない」とつづるシングルマザーがいた。生活保護の受給を勧めると、最初は拒んだ。健康なのにもらえるのか、役所で嫌な目に遭わないかと心配していた。約80通のメールを重ねて正確な情報を伝え、窓口には事前に事情を話した。女性は「子どもと生きる道が見つかるなら」と一歩を踏み出した。

伊藤さんは「支援につながろうとしない理由がある。伴走することで、生きるための支援となる」と話す。

検索サイト大手ヤフーも、特定の言葉に連動して相談窓口を表示させる取り組みをしている。（田中陽子）

No.
Date

学びを語る

近畿中央病院メンタルヘルスケア・センター副センター長 井上麻紀さん

10/8

生徒もいろいろ大変だけど、先生も心の病などが起きていた。気をつけよう。

調子が悪くなるときを知ろう

教員のメンタルヘルス

文科省の2013年度の調査では、病気休職の教職員8408人のうち、5078人が心の病だという。教員を専門的にケアする臨床心理士の話に、心当たりのある先生もいるのでは。

教員はまじめで責任感が強い人が多く、体が悲鳴を上げているのにまだがんばれると思っている人が少なくありません。体が動かなくなって受診、結局3年間休職した先生もいます。「仕事を軽減してもらって迷惑をかけたくない」と思うより、「倒れてしまってからではもっと迷惑をかける」という発想も必要です。

教員は保護者対応に追われることが多く、最近はネットの発達によって、何かあるとすぐに声を上げる人も増えています。いいことをやってもあまり伝わりませんが、不満があるとLINEやフェイスブックなどで一気に広がる。そういうことにおびえる先生がたくさんいます。

心の病は誰にでも起きうるし、いつ起こるか分かりません。自分では気が付かないうちに「予備軍」になっているケースも。気付いてもらうことがメンタルヘルスの第一歩です。

多いのが転勤して1～2年目、環境が変わってしばらく経った頃にダウンするケースです。また、5月の連休明けや、2学期の行事が一段落した頃に発症することも多い。自分がどんなときに調子が悪くなるかを知ること、いざというときに声をかけてくれる同僚や管理職が校内にいることが予防につながります。

「評価」を気にするあまり、現場から本当の声が教育委員会に上がって行かないのが現状で、行政の対策は全く追いついていません。

先生方には、教員である前に人間であることをもっと大切にしてほしいと考えています。（聞き手・芳垣文子）

いのうえ・まき　臨床心理士。神戸大学大学院修了後、兵庫県内の児童相談所や大阪府内の総合病院などに勤務。2001年から公立学校共済組合近畿中央病院（兵庫県伊丹市）に勤務、教員に特化したメンタルヘルスケアや復職支援に当たっている。今年5月「教師の心が折れるとき」（大月書店）を出版。

この表を見ると、普段聞いたり目にするいろいろな疾患がストレスに関係していることがわかる。

以下のような症状が2週間以上続く場合には、「うつ」が疑われますので、専門家（精神科、心療内科）に早めに相談することをおすすめします。

- 気分の落ち込み、憂うつな気分
- 趣味などが楽しめない
- 体重の減少または増加、食欲の減少または増加
- 寝つきが悪い、夜中に目が覚める、朝早く目が覚めてしまう、どれだけ寝ても眠気がとれない
- 気持ちが焦るイライラしやすい
- 疲れやすい
- 価値のない人間だと思う、周りに対して申し訳なく思う
- 思考力や集中力が低下する、決断が難しい
- いっそのこと消えてなくなりたいと思う

厚生労働省HPより

2015年10月8日

No.
Date

「平成25年度 公立学校教職員の人事行政調査」

平成25年度中の教職員の病気休職者は8408人。
そのうち精神疾患による者は5078人（全教職員の0.55%）で[illegible]

年代別にみると、かつては40才代、50才代が比較的高い傾向にあったが25年度調査では、20代が0.54%、30才代が0.62%、40才代が0.59%、50才代が0.64%と全ての世代で0.5%代を超えて、心の病による病気休職者が[illegible]。
教師が心身ともに健康であることは教育が成立する上で重要なことなので、教職員のメンタルヘルス対策として予防的取り組み、復職支援の両面から学校、教育委員会が取り組むべきである。

教育新聞 社説 2015.4.30より

ストレスが改善されずに慢性化していくと、メンタルヘルス面の疾患だけでなく、身体面での疾患になる場合もある。
ストレスに関連していると考えられている疾患（心身症）のうち、代表的なものは以下の表の通り。

ストレス関連疾患（心身症）

部位	主な症状
呼吸器系	気管支喘息，過換気症候群
循環器系	本態性高血圧症，冠動脈疾患（狭心症，心筋梗塞）
消化器系	胃・十二指腸潰瘍，過敏性腸症候群，潰瘍性大腸炎，心因性嘔吐
内分泌・代謝系	単純性肥満症，糖尿病
神経・筋肉系	筋収縮性頭痛，痙性斜頸，書痙
皮膚科領域	慢性蕁麻疹，アトピー性皮膚炎，円形脱毛症
整形外科領域	慢性関節リウマチ，腰痛症
泌尿・生殖器系	夜尿症，心因性インポテンス
眼科領域	眼精疲労，本態性眼瞼痙攣
耳鼻咽喉科領域	メニエール病
歯科・口腔外科領域	顎関節症

「日本心身医学会教育研修委員会編1991心身医学の新しい診療指針，心身医学，31(7)，p57をもとに作成」

厚生労働省HPより

資料1　奨励賞を受賞した生徒のスクラップノート（一部抜粋）

7. 生徒の感想・意見

3年間にわたってスクラップノートを実践してきたが、取り組んだ生徒に簡単なアンケートを行い、感想や意見を聞いた。以下に抜粋したものをまとめる。

【肯定的な感想・意見】

- スクラップノートが強制ではなかったので、自分の興味のある記事を見つけた時に、すぐ取り組めた点が良かったです。
- 新聞のスクラップをしっかりやっておけばよかったと今、後悔しています。あの取り組みは、自主的にでもやる価値があると思いました。（複数名）
- 自分で考えて取り組む課題で自然と保健関連のニュースに興味がわくようになった。

【否定的な感想・意見】

- 私の家は新聞もとっていないし、パソコンも使えないので、スクラップノートは困難だった。（複数名）
- 忙しくてスクラップノートに取り組むことができなかった。（複数名）
- スクラップノートの提出がテスト前。提出が間に合わない。（複数名）
- スクラップコンクールに応募しないのにスクラップするのは意欲が出にくかった。（複数名）
- スクラップノートによって、日本社会の課題はわかったが、以前よりも保健について関心を持つようになったなどはなかった。
- スクラップ、読むと面白かったりもしたが、ちょっと面倒くさかった。新聞をとっていないから、祖母に新聞をばさっと送ってもらって探したりと大変だった。
- たまに忘れてしまった、少し作業が雑になった、辛かった等（複数名）

【その他、改善・提案に関する意見】

- スクラップノートをみんなで共有したり、やはりコンテストがあったりすると意欲がもっとわくと思います！（複数名）
- 授業等でスクラップノートをもう少し有効活用したかった。（複数名）
- スクラップを忘れがちになり、何の記事も見つけないまま提出日が目前に迫っていることがあったので、提出を小刻みにした方が忘れなさそう。（複数名）
- スクラップノートは、「量より質」で、1ヶ月ごとに2つくらいの記事をテーマに、丁寧に感想を書く、みたいな感じがいいかなと思う。
- 授業でも新聞記事などをプリント裏面に多く載せてくださったので興味がわきました。

8. スクラップノートの成果と課題

上記のような生徒の感想・意見より、スクラップノートの作成を通して得られた成果と課題についてまとめたい。

まず、成果についてだが、誠実に取り組んだ生徒にとっては、その達成感もさることながら保健に関する最近のニュースや話題、動向について多くの知識と情報を得ることができ、保健の授業と関連付けて学習を深めることにつながったようだ。これははじめに期待していた健康情報リテラシーの向上に大いに寄与したものと考えられる。日常的に新聞だけでなく、テレビのニュースや番組等でも保健に関する報道に自然と耳を傾けるようになった生徒がいたほか、スクラップが終わっても新聞を開くと無意識に保健に関する記事を探してしまうといった声も聞かれた。また、取り組みの熱心な生徒ほど医薬系・保健衛生系・看護系といった進路を希望する者が多く、自身の夢や目標に直結していることから、スクラップ作業が苦でなく、自分のキャリア開発のためにも前向きに取り組むことができたのではないかと思われる。スクラップノートを1年間継続して取り組めた生徒にとっては、こちらが理想として掲げた「年間を通して保健への興味・関心を維持・継続させる」ことに近づけたのではないかと感じている。さらに、1つの記事に対し、Webで追調査したり、他の記事との比較や関連性について深く掘り下げたりと多面的に考える姿もみられ、ヘルスリテラシーの育成にも関与したことがうかがえる。

次に課題であるが、スクラップ作業の手間や労力といった負担を挙げる声が多かった。他教科の課題や提出物もある中で新聞を読む時間がないほど忙しい、新聞を購読していない家庭にとっては作業が大変、といった声も多数聞かれた。また、作業の煩わしさから雑になったり、手を抜いたり、敬遠してしまったりといった声も見受けられた。評価の都合上、提出を学期末に設定したが、定期考査と重なって仕上げの時間がとれないといった意見も聞かれた。スクラップノートが中途半端に終わってしまった生徒にとっては、負担感ややらされ感が残り、残念ながらこちらの期待する成果にまで到達できなかったように見受けられた。

いずれにしても、日々のルーティーンとして、作業の定着を図れた生徒とそうでない生徒とでは大きな差がみられ、継続が苦にならない生徒にとっては取り組みを通じて、やりがいや楽しさ、面白さを得られたものの、そうでない生徒にとっては苦痛や負担を感じることが多かったようだ。ただし、これはどんな課題にも同様のことがいえ、いかにして生徒に高いモチベーションを維持させつつ取り組ませるか、提出率や提出内容を向上させるかは指導者の工夫が求められよう。

9. 今後のスクラップノートの方向性を探る

そこで、今後もスクラップノートの取り組みを可能な限り、無理なく実践していくにはどのようにしたらよいか。また、スクラップノートを授業等で有効活用することができないか。生徒からの意見・提案を参考に検討したい。

9-1.　提出の義務化

希望者のみの任意提出と全員に提出を義務化する方法の2通りを試してみたが、この実践の趣旨からして結論としては全員に取り組ませたい課題であることに変わりはない。関心・意欲の高い生徒は自然と積極的に取り組むが、そうでない生徒をどのようにして主体的に取り組ませるかが工夫のしどころであり、全員に取り組ませることを前提にそのための具体的な方策を以下に述べたい。

9-2.　スクラップの期間

スクラップ期間は当該年度の1年間は変えずに続けていきたい。長期休業中等の期間限定の課題としても検討したが、保健の興味関心を維持するためには通年で取り組む必要があると現時点では判断する。

9-3.　スクラップの形式

これまでは保健に関する記事であれば、片っ端からスクラップしていくよう指導していたが、そうするとオリンピックやワールドカップといったスポーツ面の記事（教科書の体育分野相当）を丸ごと貼付する生徒がみられた。確かに記事の分量は稼げるかもしれないが、スクラップの質としてはマンネリ感がみられ、コメントも低調なものが多く、こちらの期待するノートの内容からかけ離れてしまった。

そこで、量より質を要求することで、教科書の保健分野の単元とリンクするようなノートづくりを目指したいと考えた。例えば、上記に紹介した生徒の意見のように、1か月に2つの記事を選定し、その記事に対して自分の考えや感想をきちんと記述する方法であれば忙しい生徒にとっても負担が軽く、作業ができるのではないだろうか。また、記事の選別の際にかぶりや重複を避けて、様々な内容の記事がノートに並ぶことが予想され、授業との関連性もより幅広くなることが期待できる。なおかつ、月に2つというノルマを設定することにより、年間を通じて細く長く長期的にスクラップを続けていくことにもつながる。新聞を購読していない家庭でも、学校や大学の図書館の新聞コーナーで閲覧し、月に2つの記事を画像や転写、コピー等にて持ち帰ることが可能であろう。

一方で、意欲の高い生徒はこれまで同様に、自分の興味のある記事を中心にたくさんの記事をスクラップし、月に2つの記事といわず、ノートが2冊目、3冊目へと到達してもかまわないこととしたい。したがって、生徒には

①月に2つ以上（最低2つ）の記事をチョイスしてスクラップする方法（量より質）
②とにかく保健に関する記事を隅々までスクラップする方法（質も量も）

のどちらかを選択させ、自分のペースで継続して実施していけるような指導をしていくことが望ましいのではないかと考える。

9-4.　回収時期

ノートの回収時期については、これまで通り学期に1回とするが、定期考査前や定期考査最終日を提出日に設定すると、生徒の取り組みに支障をきたすことが判明した

ため、上記のような時期を外したい。ただ、こちらもノート点検や評価の時間を確保しなければならないため、それらを考慮すると、おおよそ6月中旬（定期考査6月末）、11月末（同12月上旬）、2月下旬（同3月上旬）の年3回をノート回収のタイミングとして設定するのが相応しいのではないかと考えている。生徒には回収時期について定期的にリマインドの声かけをするなど、スクラップを忘れずに取り組ませるよう指導者側からこまめにアプローチしていくことも大切である。

10. 今後の展望

今後の展望として、せっかくならば全員が取り組んでいるスクラップノートを授業内で効果的に活用することが挙げられよう。学習している単元と関連づけて扱うことで学びを深めることはもちろん、生徒がどんな記事を選んでスクラップしているのか、生徒同士でノートを共有しても面白いと思う。また、お互いにノートを交換し、記事やコメントを読み合うことによって、違った観点や新たな気づき・発見につながっていくことも期待できる。さらには、スクラップノートをもとに特定の記事を読ませ、テーマを設けてディスカッションやディベートといった言語活動に発展させることも想定される。このような実践が次期新学習指導要領で軸となる『主体的・対話的で深い学び』に結びついていくことや保健の『見方・考え方』として掲げられている「健康や安全の視点から情報を捉え、健康の保持増進と回復を目指して疾病等のリスクを減らしたり、生活の質を高めたりすることについて考えること」にもつなげていくことができるのではないかと考えている。このように、授業内でスクラップノートを活用した活動を定期的に導入することで、スクラップ作業に対する生徒のモチベーションやヘルスリテラシーの向上及び週1回の授業がより一層、有意義で充実したものへと変貌するのではないかと思い描いている。

現在、朝日新聞のスクラップコンクールは終了してしまったが、東京新聞が主催している「新聞切り抜き作品コンクール」*8をはじめ、新聞社以外のコンクールやコンテスト等があれば積極的に活用し、少しでも生徒が前向きに取り組める環境を提供していくことも必要である。さらに、朝日、毎日、読売、東京新聞の各社ホームページではＮＩＥ専用ページが用意され、ＮＩＥ推進のための実践例紹介や記者派遣、出前授業等も受け付けている。このような新聞社独自の企画を活用することで、ＮＩＥへの興味関心や理解を深めていくことも効果的ではないかと考える。

最も緊急性や重要度の高いものとしては、スクラップノートを保健の評価にどう組み込んでいくか、健康情報リテラシーの向上をどう見とっていくか、評価規準やルーブリック等の検討・整備も早急に進めていかなければならない。また、1年生が2年生に進級後、探究Ｉの授業（探究活動）において、保健でのスクラップノートの取り組みがどれだけ活かされたのかを追跡調査・検証することで、より理想的な実践方法や今回の取り組みの有効性について言及することができるかもしれない。

11. まとめ

健康情報リテラシーの育成をねらいとし、保健学習におけるＮＩＥの導入に目をつけたところから始まった今回のスクラップノート作成の取り組みだったが、まだまだＮＩＥを活用した発展的、応用的な実践に至るまではもう少し工夫の余地がありそうである。保健を日常的に意識させ、生徒自ら健康情報を入手・取捨選択し、実生活に活用していくために、そしてヘルスリテラシーを身に付け、自分の力で健康を決定づけていくためにも、引き続きＮＩＥ活用の可能性を探っていきたい。将来的には、生徒の作成するスクラップノートを使って授業を展開し、主体的・対話的で深い学びへと導けるような授業を視野に、さらなる教材開発に取り組んでいきたいと考えている。さらには、このスクラップノート作成の経験が 2 年次の探究Ｉの授業はじめ他教科の学習に活かされることで、様々な場面において、より高度なリテラシー能力の育成と定着に結びついてくれればと願っている。

＜出典、参考・引用文献＞

1)「ヘルスリテラシー　健康を決める力」Web ページ
http://www.healthliteracy.jp　2018 年 2 月 6 日閲覧

2)「保健学習の課題」保健学習推進委員会報告書　2010 年

3)　中教審初等中等教育分科会　2016 年 5 月

4)「日本の中学校健康教育における課題とヘルスリテラシーの必要性に関する一考察」
山本浩二、渡邉正樹　東京学芸大学紀要　芸術・スポーツ科学系　pp.63,87-95
2011 年 10 月

5)「教育に新聞を Newspaper in Education」Web ページ
http://nie.jp　2018 年 1 月 25 日閲覧

6)「次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ」文部科学省　2016 年 8 月

7)「朝日新聞 全国新聞スクラップコンクール」Web ページ
http://www.asahi.com/shimbun/nsc/　2017 年 5 月 31 日閲覧

8)「読売教育ネットワーク　ＮＩＥ教育に新聞を」Web ページ
http://kyoiku.yomiuri.co.jp/torikumi/nie/　2018 年 1 月 25 日閲覧

9)「月刊切抜き速報　健康りてらしぃ」 ニホン・ミック

10)「ヘルスリテラシー　健康教育の新しいキーワード」 中山和弘他　大修館書店 2016 年

11)「感じと気づきを大切にした保健の授業づくり」阿部隆行他 教育出版　2013 年